

やってみよう！ 自由な保育から 生まれる主体性

なかのまるのなか保育園
大きなおうち



実践に至った経緯

今年度はコロナウイルスの流行に伴い、例年通りの保育や活動、行事を行うことが難しい状況となった為、感染症予防に留意した形の新しい生活様式での保育を考えていく必要があった。また、保育者の頭の中ではこども主体の保育を理解していても実際の保育現場ではそれらをうまく生かすことが出来ていない思いがあった。

その中で、7月に行った夏祭りでは5歳児クラスの子どもを保育者が見守る中、計画から開催まで子ども主体で取り組むことが出来、夏祭りを作り上げ大きな成果となった。



このことをきっかけとして、日々の活動や遊びの中で自由な発想や考えを取り入れ柔軟な保育を実践することで、現在よりも子どもにとって良い保育が出来るのではと考えるようになった。

以上のような職員の思いから今年度、運動会に代わる取り組みとして、1ヶ月を通して運動に親しむ「運動月間」を10月に企画しており、本企画にスポットを当て実践を行っていくことで自由な保育から生まれる子どもの主体性について研究していきたい。

職員の意識改革・子どもへの種蒔き

対象クラス：3,4歳児クラス(2歳児・5歳児クラスも不定期で実践)

① 前期(10月：運動月間)

- 運動月間の実施。
- 週ごとにアンケートと振り返りを行い、翌週の保育に活かす。

② 後期(11月：日々の保育の中で)

- 子どもが室内活動と戸外活動の選択を行う。室内は異年齢保育、戸外は原則クラス活動ではあるが、担当保育者はその日によってクラスを入れ替わる。
- 活動や遊びの流れに固執し過ぎず、子どもに合わせて柔軟に変化させる。
- 引き続き週ごとにアンケートと振り返りを行い、翌週の保育に活かす。



実践を行う中で見られた変化、感じたこと

10月:子どもの声に耳を傾け、見守る保育を続ける事で少しずつ職員の変化が見られ、子どものつぶやきに耳を傾ける姿勢で保育をするようになっていった。職員の意識が変化してくことで子どもの姿も変化していき、保育者がイメージしていた活動からは脱線していたが、その遊びが大いに盛り上がることもあった(下記エピソード①参照)。



11月:主活動に限らず日々の保育の中でその時にやりたい遊びや活動を口に出し、その活動や遊びをする為に生じた問題に対する解決策や方向性を示せるようになった。又、活動の順番や時間配分等も子どもたち同士で話し合いながら決めていけるようにもなった(下記エピソード②参照)。

戸外遊びよりも室内で遊びたいという考えを示す子が日に日に増えていった。

子どもの遊びを一步引いた所から見る中で興味関心が遊びのどこに向いているのかが見え視野が広がった(下記エピソード③参照)。一方で、子どもの意見や考えはどうしてもそれまでの保育の中から生まれた活動や遊びに限定されがちな部分が多く、子どもの考えだけでは限りがあり遊びの幅は広がらなかった。

◎実践中の主なエピソード

・ エピソード①3歳児10/26~10/30

普段はブロックや電車遊ぶことが多く制作があまり得意ではない様子の子が、ハロウィン遊びとしてクラスで花紙を使用しお菓子や食べ物作りを行った。黄緑色の花紙を丸めたり千切ったりしているうちに、それを「千切りキャベツ」に見立てると、その発想が他児にも評価され盛り上がりを見せていた。自分発信の遊びが広がったことで自信に繋がり、その日以降制作コーナーで遊ぶ姿が頻繁に見られるようになっていた。

・ エピソード②4歳児11/24~11/27

子どもが自分たちで決めることが習慣化し、公園とバスの車庫を見に行つた際に、先に遊ぶのかそれとも先にバスを見に行くのか尋ねたところ、「遊んでから見に行こうよ!」と声が多く上がった。また、帰る時間はどうする?と尋ねると、普段は保育者が「長い針が〇〇になったらお片付けしようね」と声を掛けている為、いつもだいたい公園から帰る時間はどれくらいであるかを覚えており、「(長い針が)9にする?10にする?」と子どもたちで話し合い「10にする!」と決まった。

・ エピソード③3歳児11/24~11/27

公園に落ち葉が積もっており、それを保育者が角材でブルドーザーのように集めてみせると、子ども達もやってみたくて大変集まってきていた。しかしすぐに飽きてしまう子どもも多く、最終的に残った一人の子が黙々と落ち葉集めを行っている他の子が「一緒にやろう」と近づいたが断られた為、自分から工事現場の設定で警備員役を務めていた。その後、更に他の子が参加し、今度は一緒に押そうとしたが上手く進まなかった為「じゃあせーので押そう!」と声掛けし合い、タイミングを合わせる等工夫をすることで動かすことが出来るようになった。

実践を終えてのまとめ

保育者が子どもに意見を聞いたり眩きを拾うことで、子どもの自発的な発言が増えていく変化が実践した2クラスで見られた。このことから、子どもの眩きを丁寧に拾うことで柔軟に対応し成長していけることを実感した。また、職員も主体的な保育を意識していく中で保育のエピソードや反省を重ねることで、より深く子どもの主体性について考え行動するようになった。

また進めていく中で、子どもの意見や考えはそれまでの保育環境や活動内容に縛られることが多くあり、意見を聞くだけではなく時には教育という意味でも新しいものを取り入れたり遊びを子どもと一緒に更に掘り下げていくことで、好奇心や発想の柔軟性を育むことに繋がると考えられる。

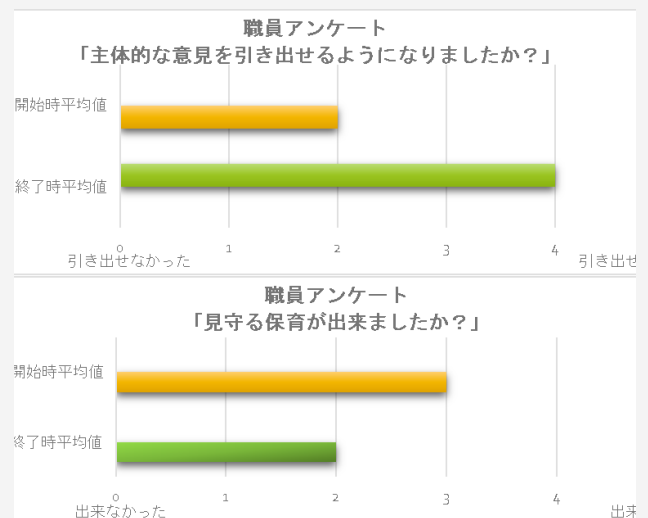
今回は3、4歳児クラスに限定した形で実践が行われたが、今後全クラスで取り組むことが園全体の意識改革に必要なだと考える。



アンケート結果について(職員アンケート参照)

「主体的な意見を引き出せるようになりましたか?」について10月の開始時よりも12月終了時の方が意識として引き出せるようになったことが見て取れる。

「見守る保育が出来ましたか?」について10月の開始時よりも12月終了時の方が見守る保育が出来なくなったという意識が高まる結果となった。考察として10月開始時には見守る保育について分かっていたつもりでいたが、実践していく中でその難しさを理解し、今回の結果に至ったと思われる。そして、保育所保育指針に記されている「応答的な保育の関わり方」を実践していくことが理想的な見守る保育に繋がると考えられ、今後の課題となった。



参考文献:

厚生労働省「保育所保育指針」(平成29年3月31日厚生労働省告示第107号)